
君に会わねば

雪芳

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に会わねば

【Nコード】

N3585J

【作者名】

雪芳

【あらすじ】

母親が見知らぬ男性と二人っきりで会っていた。現場に居合わせた主人公は……。

テスト勉強に身が入らず、気分転換にファミレスへ立ち寄ったのが偶然の始まりだった。

問題集に並ぶ英文が暗号にしか感じられなくなってきた、ドリンク片手にしなだれる。ついには睡魔も寄り添い、さあ意識を手放そうとした瞬間、聞き覚えのある声が俺の鼓膜に滑り込んできた。

反射的に出入り口を見、問題集で顔を隠す。

不味い、——母さんだ。

珍しく今日は厚めの化粧にシックなコートを着込んでいるが、四年も息子をやっているので一目で分かった。母さんのヒールの音がコツコツと近づく。

一人でファミレスに行くなんて中学生のくせに生意気ねっ、という叱咤が頭でリフレインする。

見つかりませんようにと願っていると、俺に気づかなかったのか、母さんは特になにをするでなく俺の後ろにあるテーブル席に座った。ホッと胸をなで下ろす。各テーブル席の間には低い仕切り板があるので、立ち上がりさえしなければ存在を知られることはない。

しかし、まいったな。これじゃ俺も帰れないじゃん。

自分の運の悪さに暫し呆れつつ問題集を持ち直すと、「ご無沙汰しています」という男の声。

誰だろう、やけに渋くて低い。人を不思議と安心させるような包容感のある低温に、自然と背後に意識が伸びる。

「あの子が生まれる前ですから、十四年ぶりですね」

母さんの返事に、俺はますます耳朵を動かした。あの子とは俺のことだろうか。兄ちゃん二人は共に十五を過ぎている。

「私ずっと、貴方に会いたかったんですよ」

え？

母さんの非家庭的な言葉に、心臓をはかれる。まるで古い恋人に使うような……って、恋人！？

「僕もあの夜から気になっていました」

えええ、あの夜ウッ！？

静かな沈黙が漂う。まるでメロドラマのワンシーンのような空気に、俺の思考が凍り付く。

母さんが浮気をしていた。信じられない事実が喉を強く握りしめる。目眩を感じる。しかし事実は更に爪をたてた。

「私、感謝したくて。……貴方がいなければ、あの子は私のところにはやってきませんでした」

完全に頭が白くなった。

疑惑のパズルがカチカチと組まれる。

十四年前から会ってなくて、母さんは浮気をしていて、男の人がいなければ俺は生まれて——いない？

「どういうことだよッ！」

理解するより体が動いてしまった。気づくと俺は立ち上がり、二人に怒声を放っていた。

「……春」

啞然とする母さんを無視して、男を睨みつける。マネキンのように不自然なくらい端正な顔をした三十代くらいの男。

こいつが俺の？

「うわゝ、中学生なのに大きいね！」

緊迫した空気をバツサリ断ち切って、男が両手を広げる。あまりにも冗談めいた明るい態度に俺は思わず声を荒げた。

「ふふふざけんなマネキン男ッ」

「ちよつと春、自分の名付け親になんてこと言うの！」

「自分の親に暴言吐いて何が悪いんだよ！ 大体なんでこいつが俺の名付け……」

アレ？ 名詞がひとつ多い？

浅草寺の仁王阿形像よろしく、歌舞伎役者の決めポーズよろしく、ダイナミックに固まる俺。に、男は、やあやあ座りたまえと腰をずらして開けたスペースを叩くのだった。

——偶然とは、人と人とを奇妙なほど結びつけるものだということ。だから時に人はそれを、未知の何かが与えているような氣に陥る。

母曰く、それは運命らしい。

十四年前、母さんは駅の待合室で座っていた。ちよつと終電が出ていった午後十時。駅は閉められようとしていた。

「どうしよう……」

溜息が漏れ、空中で白く濁る。待合室を出ると、かつ然たる街は飲み屋の光やビジネスホテルの光しか灯っておらず、雪が舞っている。

寂しげな六華。お腹の中に俺を抱えた母は殆ど無一文、家出人だった。

悲壮に我を忘れていると、

「どうかしましたか？」

ふいに声をかけられた。

振り向くと男性マネキンが立っていた。よくよく見るとマネキンは人のようだった。

「あの、夕方からずっと待合室におられましたよね。駅ビルで買い物

してて……気になってて、その」

すいません、と男は頭を垂れる。

母さんかというと、困窮しきった中で暖かく言葉をかけられたことと、多分マリッジブルーってやつね（本人談）から、子供のようにわんわんと泣き出してしまった。

「どどどうしました！？ 取りあえず、お腹にお子さんがいるんですよね。冷えちゃダメです。車に乗って下さい、暖かいんで」

狼狽える男に促され、白い軽自動車の後部座席に腰を沈める。男が言ったとおり、車内は春のように暖かった。ハンカチを手渡され——何故かクマ柄のハンカチで——溢れる涙を拭いながら、母さんは思考を巡らせた。

見知らぬ男の車に乗ってしまったけど、大丈夫かしら。

思い、母さんだけでも不安ではなかった。それほど車内は温風が吹いていて、それは長時間スイッチが入っているようだった。つまり、母さんの身を案じて、熱いくらいに焚いていたのだ。男は上着を着込んだまま、時折様子を伺うように視線を揺らす。大きく澄んだ目に通った鼻筋、陶器のような肌。黄金律の恩恵を受けてどこか人間離れた容貌には、しかし暑さを堪えるような紅潮と薄い汗が滲んでいる。

「もしかして、ずっと暖房をつけてらしたんですか」

「え、まあ」

「もし私のためでしたら大丈夫ですよ、暑がりなんで」

「そっ、そうですかっ？」

動揺したのか、エアコンを冷風にまで切り替える。

「あの……、中で」

「そうですね。アハ、アハ」

暖房がちょうど良い風力に収まると、次に流れたのは重苦しい沈黙だった。母さんの嗚咽と鼻水を啜る音だけが申し訳なさそうに響

く。

男の麗しい顔がフロントガラスに映る。母さんがそれに軽く見ほれていると、意を決したように男は言葉を選び始めた。

「よろしければお宅にお送りしますが」

ある種当然の気遣いに、だが母さんは首を左右に振った。

「家には帰れないんです」

想像はしていたのだろう、男は眉を下げ、続ける。

「どうされるおつもりだったんですか。妊娠してらっしゃるんですよ」

細身の体に玉がくつついたような腹を抱えて一日中待合室にいるというのはただ事ではない。ここから先のことは予測不可能なのだろう、男の緊張が母さんにも伝わってきた。

けれども母さんには上手く返すための余裕は無かった。それほどに追いつめられていて、母さんに出来ることと言ったら、見知らぬ優しい男に、事の顛末をチグハグ語ることくらいだった。

「お財布に、入ってた分だけ持って、バスを使いました。お金が許すだけ、遠いところに行きたかったんです。じゃなければ……奪われて、しまつから」

「何を？」

「この子をです」

母さんは、俺を愛おしそうに撫でる。止まらない涙でちぎられそうな声を懸命に引き寄せ、連ねてく。

「三番目の子、なんです。上に男の子が二人いて。五歳と四歳。この子は、三番目。だから、養子にくと、言われました」

俺は思わず、「養子!？」と叫んだ。

ファミレス全体に響き渡る大声に、客の目がパツと集中する。俺は誤魔化すように「ようしようし……ああ、うん、ようし」と繋ぐ。

「言ってなかったもんね」

母さんが目を細め、ため息混じりに空中を仰いだ。

「あんたもうちよつとで養子に行くとこだったのよ。二十歳になったら言おうかなって思ってたんだけどね」

俺の人生はいたって平凡だと思っていたが、意外や意外、生まれる前にそんなひと悶着があつたなんて。お母さんとマネキン男の経緯を聞くにいたり、さっきから驚いてばかりだ。そして今の状態と照らし合わせて、なんとも不思議な感覚になっていた。

最初から家族で、ずっとごくごく普通に家族をしてきたのだと思っていた。ただけにして、そうじゃなかったんだ。

「驚くよね、僕も驚いたよー」

しみじみと横に座る男が呟く。その横顔は、大衆じみた台詞と裏腹に、どこまでも完璧だ。で、結局、こいつは何をしたんだ？俺はどうして養子に行かなくてすんだわけ？

首を傾げていると、母さんが鞆からハンカチを取り出した。クマ柄の、安っぽいハンカチだ。いつも化粧台に置いてあるやつ。

「あ、懐かしい」

男が身を乗り出すと、

「そうでしょ。あの後結局返せずじまいでしたからね」

母さんは懐かしそうにハンカチを撫でた。そして目を閉じて、再び“運命”のあの日を、語り始めた――。

「よ、養子ですか!？」

その日、運命の日。男もまた息子の俺と同じく驚き目をひん剥いた。

「はい。故あって……、姉が、私の姉なんですけど、子供が……」
「いらつしやらないんですね」

母さんは男の目を見て、深く、深く頷いた。

「小さい頃に、大きな病気をしたんです。両親や親戚が、夫の両親

てきた。

姉夫婦は長年不妊を責められてきたために守ってはくれず、友人に相談すると一人くらい良いじゃないと言われた。

家に住まわせて貰っているという義理からか、夫さえ両親に肯定的だったのに。

たった一言で母さんの肩に掛かっていた重圧がふっと軽くなる。

見知らぬ、通りすがりの男の一言が、だが母さんにとっては何よりの救いだっただ。

自分の気持ちを知っている誰かがいる、母さんは心から感謝した。そして、帰ろうとようやく思えた。

このままフラフラしていても、この子のためにはならない。もしこの子が堕ちるようなことがあったら、私はそれこそ生きてゆかないだろう。

——帰ろう。

「だから、このままじゃ良いとは思えません。家の電話番号を教えてください」

母さんが諦念した瞬間、男はズバツとそれを遮った。男が凜々しく眉をあげる。

「え……あの、え」

「ついでに旦那さんの名前も！」

やたら綺麗な顔から放たれる妙な気迫。ついつい押されてしまう。母さんはポロツと、

「××ー×××××の、雅之です」

「××ー×××××の、雅之めッ！」

男は威勢良く扉を開けると外へ飛び出した。車の後方、かなり遠い位置にぼつねんと佇む駅の公衆電話に駆け込み、受話器をあげる。

何やら話している様子。胎教に悪そうな状況を、だが藁にもする思いの母さんはいつい希望を抱き見守ってしまった。もしかしてあの人がいたら夫を説得できるかもしれない、なんて妙な期待が自然と湧くのだ。

数分後、男は受話器を親の敵のように放り投げると、車に戻ってきた。寒そうに歯をカチカチとさせながら運転席に座り、

「雅之さんだけ、来ます。とても心配されてましたよ」
マネキンよろしく、微笑んだのだった。

——母曰く、運命の瞬間。

結論から言おう。

俺の家は父さん、母さん、兄ちゃん二人、俺の五人家族だ。

祖父ちゃん祖母ちゃんとは駆け落ちをきっかけに、勘当されたという。

年の離れた、小さな従妹もいるんだ。

問題集に並ぶ英文が暗号にしか感じられなくなってきた、ポンジユース片手にしなだれる。

ついには睡魔も寄り添い、さあ意識を手放そうとした瞬間、聞き覚えのある声が鼓膜に滑り込んできた。

『DJジャックフロストプレゼンツ、ミュージックトゥナイト』

男の俺でもグツと来るダンディな声が携帯電話のラジオ機能から流れる。思わずパツと覚醒して、俺はラジオを手繰り寄せた。

『今日のテーマは会いたい人。早速、お葉書を紹介しよう。——ジャックフロストさん、こんばんは。私は十四年前に、とてもすてきな体験をしました』

俺は耳を澄ませる。人の心を不思議と解してしまう、大きく暖か

い手に包まれるような安心感を与えてしまっ、鷹揚とした語り口。体の染み渡る柔和な振動。

筆無精な母さんが、不思議な使命感に駆られ生まれて初めて葉書に書いた、俺の出生秘話。へんてこな男と会い、母さんの運命が変わった話を聞く。

それはとても嘘っぱいくらいの、都合の良い、本当の話。

『——そして先日、息子と二人で会うことが出来ました。……うん、幸せそうなの家族ために、今日はたくさん歌を用意しました。テーマは、会いたい人。君には、会いたい人がいますか？ 願わくば、その人と君の系が、離れていても繋がっていますように……』

西洋かぶれのDJネームと知的な声で誤魔化してるけど、俺と母さんは知っている。このDJがマネキンに似ていて、そのくせ人間くさくて、とても世話焼きなことを。そしてその名前を。

あの夜、泣きじゃくる母さんの手に握られたハンカチは今、俺のポケットにいつも仕舞ってある。クマ柄に、赤い刺繍で名前が縫われたハンカチ。

春って、いうんだ。

(後書き)

2007年作成。

ラジオのおおにしたかあきにハマった頃に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3585j/>

君に会わねば

2010年12月30日05時25分発行